

## 平成 25 年度第 2 回「大村知事と語る会」意見交換要旨

- 1 日 時 平成 25 年 9 月 16 日（月、祝）午後 2 時から午後 4 時まで
- 2 場 所 ロワジールホテル豊橋 1 階 ホリデイホール A
- 3 テーマ スポーツ大会を活かした地域振興 ―世界に誇れる大会を愛知で！―
- 4 意見交換者（五十音順 敬称略）

井原 慶子 国際自動車連盟日本代表評議委員  
今井 美香 ブレーケット国際マラソン大会親善大使  
勝田 照夫 新城マラー組織委員長  
柴田 賢治郎 日本自転車トライアル協会新城支局長  
鳥居 靖 イベントプロデューサー  
森田 拓朗 旅行情報誌「東海じゃらん」編集長  
吉村 純 アイアンマン 70.3 セントレア知多・常滑ジャパン事務局長

※石川明彦氏（近畿日本ツーリストスポーツ事業部部長）は、台風による交通事情により欠席

### 【井原】

皆さん、改めまして、こんにちは。今日は、このようなすばらしい会にお招きいただきましてありがとうございます。レーシングドライバーの伊原慶子と申します。

私は、現在 40 歳ですが、まだ現役ドライバーとして世界耐久選手権という耐久レースの世界最高峰にチャレンジしております。そして、10 月 19、20 日には静岡県で行われる世界耐久選手権にも出場する予定です。その耐久選手権というのは男性ばかりで、女性は私一人が唯一参戦しております。実績上、ランキング上は今世界最速の女性ドライバーということでもあります。それ以外に、現在務めておりますのは、国際自動車連盟のアジア代表委員と世界の女性代表委員をしております。

国際自動車連盟はどんな組織かといいますと、つい先ごろ決まったオリンピックの IOC と連携しまして、スポーツマンシップとかレースの F1 とか世界耐久選手権とかいろいろな国際スポーツ競技のイベントの内容、コンテンツ、そして運営、もっと細かいところに至れば、ドーピングなんかはこの IOC と一緒に今進めているところであります。

皆さん、昨年、世界で一番のスポーツイベントに選ばれたスポーツイベントは何か御存じですか。日本では全然有名ではないですが、私が出場するカーレースの「ル・マン 24 時間レース」です。なぜかという、2 日間で何と 50 万人が集まるイベントであり、そして歴史があるからです。

この前お打ち合わせさせていただいたときに「愛知では歴史があるスポーツイベントはありますか」とお聞きしましたら、「名古屋ウィメンズマラソンが始まったばかりで、新城ラリーなんかも今一生懸命やっている」ということで、この二つの大きな大会があるというふうにお聞きしました。ル・マン 24 時間レースが世界一のスポーツイベントに選ばれた理由は、90 年も続いているということです。フランスが同じくやっているもので、100 年続いている「ツール・ド・フランス」というものもあります。

これらがなぜここまで歴史を積み重ねてくることができたかというのは、やはり組織がしっかりしているからです。そういった組織で日本代表、アジア代表として委員をやっておりますと、これを日本に持ってくることができるんじゃないかというアイデアもいろいろありますが、彼らが一番基本として考えているものは、スポーツはなぜこの世に生まれたかということなのです。

まず、スポーツが生まれた理由は、この世をよりよくしようと考えた人たちが、治安をよりよくしたりするためには人の心を強くするべきだと。人の心を強くするためには体を強くするべきだ。心身を鍛えるにはどうしたらいいかというと、まず大きな組織をきちんとつくって、その組織が毎回人間の本気を出させるような限界のルールをつくって、それにのっかってたくさんの参加者を募って、そのたくさんの参加者が記録向上を目指していくことによって社会がよりよくなっていく。

スポーツの語源をたどると「デポーディア」という語源に当たるんですが、このデポーディアというのは、要は「気晴らし」とか「憂さ晴らし」とか「取り込み」、そして「みんなを協調」という意味があるんです。まさに今愛知県が考えるスポーツ大会を活かして地域振興するというのはこれにのっかってやっていけばいいと思う。

そんな中で愛知県をより活かすにはと考えるときに、先ほど知事もおっしゃったとおり、やはり愛知は産業、ものづくりがすばらしいということで、自動車を代表としてたくさんの製造業、産業がありますので、今の国際自動車連盟もすごくそういった手法をとっているんですが、スポーツ大会を産業と絡めたり、環境を PR したり、安全を PR するところで産業、技術力を発信するというのをやっていますから、そういったことができるように何か私もお役に立てればと思います。

今日は皆さんといろいろな意見交換させていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いたします。(拍手)

【大村知事】

ありがとうございました。また後ほど御意見をいただければと思います。

続きまして、今井さん、よろしく願いいたします。

【今井】

今日はこのような席に参加できること、とても光栄に思っています。プーケットマラソン親善大使をさせていただいています今井美香と申します。よろしく願いいたします。すばらしい話を聞いた後なのでドキドキしています。

私のもともとの仕事は、人間の自然治癒力をもっともっと高めて、そして最高のパフォーマンスで毎日生活できるようなコンディショニングケアを世界中で広めています。クライアントとしては、エリートアスリート、末期がんの患者、そして富裕層のエグゼクティブの方々を中心に、世界中のスポーツイベントを回って、歩いたり走ったりすることによって健康管理をしていこうという仕事をさせていただいています。これまで44カ国、今は12カ国でお仕事をさせていただいている中で、プーケットマラソン親善大使というお仕事をさせていただいています。

プーケットマラソンの親善大使になったのは2004年、スマトラ地震があったときです。スマトラ地震があったときに、私はプーケットに足を運びました。余りにも悲惨な状態で、1年たってもなかなか改善しない。そこで何ができるんだろうかといったときに、スポーツイベントを開催することによって、プーケットが復興していくのではないかということをおもひました。

たくさんの国でスポーツイベントのオーガナイズをしているんですけども、通常のスポーツイベントと私が企画している、オーガナイズしているスポーツイベントの違いが歴然とあります。それは、スポーツイベントのその先にあるものをゴールにすることです。スポーツイベントに参加しておしまいでなく、その先にあるものを私たちはゴールにして目指していきます。

例えばプーケットマラソンでは、植林活動も行っています。それも10年目になります。650本の木を私も自分の手で植えています。そして、そこにお金落ちることによって、子供たちの教育も一緒にやっけていこうということで、学校の建設も三つほど行っています。その子供たちが大会に参加して勉強できる環境ができたときに、そこにビジネスを伝えることができ、子供たちがプーケットのために自分たちでスポーツイベントを企画しながら健康と経済のために回っていく循環的なシステムをつくるのがスポーツイベントの一番大切なことだと思っています。

通常、「やったー1番」というのではなく、スポーツイベントというのはもともと、世界中歩いていくと、私が答えを見つけたんですけれども、コミュニティイベントなんです。世界中の人たち、プーケットマラソンは49カ国から参加してくださっています。全くコマーシャルをしていなくて、私も「えっ、あなたが」と言われるぐらいですけれども、本当に口コミでみんなが集まってきてくださっています。ファンドレイジングなものにしたり、教育と絡めたり、植林をしたりということ以上に、もう一回そこに来たい、もう一回来てみたいという仕掛けをそこの中にしていくなです。

そのためには、まず社交の場をつくります。来た人が、もちろん地域の人もそうですし、そこにいる子供たち、そこに住んでいる方も含めたコミュニケーションもします。前日にパスタパーティーをやって、世界中から来た人たちとコミュニケーションができるような形にしたり、終わった後に「よかったね」「楽しかったね」と言える場所も用意します。スポーツを通して、長くそこに滞在するというシステムを私はつくっています。1日だけで行って帰ってくるというのは単なるイベントであって、私が考える、本当に長くスポーツを愛しながら一生続けていくということに対しては、やっぱりそこにもう一回来てたくなる仕掛けと、長く滞在できるようないろいろな仕組みをつくっていく方がいいかなと思っています。

49カ国というのは世界でも珍しくて、まだまだ6,000人、7,000人の小さな大会ですけれども、8割がリピーターです。そして家族で来られます。イベントの内容としては、2km、5km、10km、フル、ハーフと、家族が参加できる形にしています。世界から注目されるスポーツイベントというのは、ただそこに大会があるだけではなく、環境のことエコのこと、そしてチャリティーというような、スポーツ競技以外にも何か意義や価値があるものをプラスしていくイベントがとても大事なかなと思っています。

そして、すばらしいことに、世界の富裕層の方たちはそういう大会にとっても興味があって、そこに対して支援をしようという形で、資金の助成もしてくださったりしています。

外国人のリピーターをたくさん増やしていくには、やっぱりもう一回来てみたいという中でコミュニケーションができるような触れ合いもとても大切かなと思っていますが、日本人は外国の選手と触れ合うのがすごく苦手です。でも、スポーツイベントというのはおもしろくて、「どこから来たの」「誰と来たの」「何に出るの」「頑張ろうね」、たったこれだけでコミュニケーションがとれます。そして、「大丈夫?」「元気?」「やれる?」と言いながら、ゴールしたときには「どうだった?」「また来年会おうね」と言いながらコミュニケー

ションをとっていく、今はフェイスブックという面白いものがあるので、そこでがんと広がっていきます。私は毎年、何千人もの方とお話をしながら走っています。

あと、医療体制に関しても、ただただボランティアを募るだけではなくて、私が仕掛け  
ているのは、医療チームであれば医療にかかわる方々にボランティアをしてもらいます。  
例えば、看護師であったり、セラピストであったり。「来てぜひケアをしてください、お願いします」と言うと、皆さん「いいですよ」って必ず来てくださいます。なので、テントにいる方々はただのボランティアをしてくださる方ではなく、専門の人たちが何があってもいいようにサポート体制をつくっています。

パーティーを企画するんですけども、そのパーティーも社交の場とします。なので、Tシャツ、短パンではなくて、もっとすてきに、せっかく参加するんだったらイベントだけではなくて、ちょっときれいな服も用意したほうが面白いよね、という形で社交の場も楽しんでいます。

あとは、いろいろな国の留学生や、そこに来ている人たちにボランティアをお願いして  
います。例えば学生であれば、いろいろな国の人たちと本当は仲よくしたいんだけど、な  
かなか外国人同士も友達ができづらんですね。その人たちにお願いしてボランティアを  
してもらえるのであれば、日本の若者も一緒に、スポーツを通して、「大丈夫」「元気」「頑  
張ろうね」、ただそれだけの言葉でちょっと近づくんです。そうすることによって、ちょっ  
と外国に行ってみようかな、そういう人たちとプロジェクトを組んでみようかなというの  
がすごく簡単に、スポーツを通してできます。

そしてもう一つ、外国の方々がボランティアを一緒にしてくださることによって、もし  
くは留学生の方々に手伝ってもらうことによって、その人がその国に帰ったときに、「私ね、  
日本でこういうボランティアを愛知でしてきたんだよ」ということを必ず話してください  
ます。そうしたら、今度に行ってみようかというコミュニティが生まれます。そういうふう  
にして外国の人たちと触れ合って、ネットワークをつくって、そして楽しい時間をつく  
るといこともとても楽しいかなと思って企画しています。

それから、一番大切なのは、いろいろな企画を盛りだくさん用意するのではなく、主催者の熱い気持ちです。トップの熱い気持ちがスタッフに伝わり、そしてスタッフの気持ちがボランティアの人たちに伝わっていきます。そこに来た参加者の人たちがきっと楽しくて、うれしくて、また来たいという気持ちになって帰っていけます。いろいろな世界中の大会に参加してきましたけれども、そういう気持ちがない大会もたくさんありますし、も

しかししたらこれは利益だけのためにやっているんじゃないかなという大会もたくさんあります。そういう気持ちは絶対に大会に反映され、そして参加者の気持ちにも伝わっていきます。

今たくさんの方の国のスポーツイベントに関わらせていただいているんですけども、居心地のいい、気持ちのいい、もう一回参加してみたいなと思ったスポーツイベントを集めてみようということで、私のほうに、スポーツの格付けの、競技的に1番2番ではなく、もう一回行ってみたい、一生行ってみたい、また参加してみたいというミシュラン的なものをつくってみようじゃないかというお話が来ています。もし愛知県にそういうものがちょっとできるのであれば、また面白いかなと思います。

私は、自分が経験したことから、一生楽しい、自分の心と体のために長くスポーツを通してやっていただけるといいなと思う仕事の中で、たくさんの方の国に行って、そして「あなたはどこから来たの」という話をされたら、私は「豊田」と言わずに「愛知県から来ました」と必ず言っています。「愛知県はどんなところ」「東京と大阪の間」としかまだ言えませんけれども、世界に通用するような、とてもすてきな大会ができるといいなと願っています。ありがとうございました。(拍手)

#### 【大村知事】

ありがとうございました。また後ほど御意見をいただければと思います。

続きまして、勝田さん、よろしく願いいたします。

#### 【勝田】

新城ラリー組織委員長の勝田と申します。

私は以前トヨタ自動車に勤めておりました、トヨタ7ー古い方は御存じだと思いますけれども、レーシングカーをつくっておりました。レーシングカーというのは、あのころ非常に不安定な状態の車が多くて、完成度も非常に低かったわけですが、その中で海外の技術を身につけようということでいろいろとやってまいりました。ただ、私の場合、人数が少ないものですからテストドライバーもしなければいけない。物をつくり、そしてサーキットに持ち込んで、レーシングドライバーでなくても走らないとできないという時代がありました。やはりあのころのレベルの低さということで、多くの事故が発生しました。その時点で、トヨタ自動車として、また日本のモータースポーツ界としても、第一期、創成期のピリオドを打つ時代がありました。

その時代に、たまたま先輩でラリーの全日本トップメンバーがいて、初めてラリー

を見に行ったときに、レースとは違って、ラリーの奥の深さとか、それからまた未知の世界に挑戦する意味合いであるとか、そういうことから、私の場合はたまたまレーシングカーをつくりつつ、プライベートではラリーに参加した時代がありました。

そして、たまたま全日本で1位になったときに、今のような情報がない中で、イギリスの世界選手権のラリーで観客動員が200万人ということを雑誌でよく見たんです。そんなことはあり得ないだろうというところから非常に興味を持ちまして、プライベートでイギリスでの世界選手権のラリーに参加したのが1974年です。大分古い話ですけど。

行ったときに何に一番驚いたか、まず観客の多さ、それからまたそこに携わる、先ほど井原さんも言われましたけれども、オフィシャルスタッフ、そういう方々の年齢の幅広さを見たときに、日本のモータースポーツの社会と欧米の歴史の違いというものを非常に強く感じました。

そこから9年間、勉強という意味も含めて、私のチームは全てラリーの場合は2人でやるものですから、助手席にイギリスの方に乗っていただき、チームも全部イギリスの方たちにお願ひし、9年間走ってまいりました。

このラリーというのは、小さな国のように見えますイギリスですけども、ロンドンをスタートしまして、スコットランドまで上がり、ウェールズのほうまで下がってきてフィニッシュをするという非常に長い、今でこそ世界選手権は短い日にちと距離で走っておりますけれども、あのころは5日間、3,800kmぐらいを走り切るわけで、大変長い距離でありました。

その結果1983年に日本人で初めて世界選手権でクラス1位をとり、それを一つの分岐点としまして、あとは若者の教育指導、それからオーガナイズを日本のモータースポーツ界にうまく活用していきたいということで、主催と若者の育成をやってまいりました。

その中で、11、12年前、小泉さんの時代に、内閣府から各市町村に対して地域再生計画についての提案を下さいというところから、新城市が第1号でたまたま通ったということで、JAFから相談があり、新城市で何ができるかを考えたときに、予算をかけずに何かできないかという非常に難しい話だったんですが、10年前からラリーを開催し、去年は3万7,000人という観客動員をさせていただきました。さらに、今年には愛知県の支援もいただきながら、観客動員だけが目的ではありませんで、地域の方々に役に立つモータースポーツをやらなければ意味がないというのが私の考えで、トヨタ自動車がF1をやったりいろいろやってまいりましたけれども、あくまでも、モータースポーツが社会貢献する場面

が形で見えない限り、日本の社会ではモータースポーツの認知度が絶対に上がらないとい  
うところから、ちょうど1年半前にトヨタ自動車の豊田章男社長と接点がありまして、彼  
にラリーの魅力、そしてモータースポーツの魅力を少しでも理解していただくというこ  
とで進めてきて、それがなぜか彼に非常に大きなインパクトがあったようで、昨年の新城  
ラリーに参加し、つい昨日も富山のラリーに彼は参加してクラス1位をとったわけです。

彼もレースをやっている中でラリーの必要性、そしてもう一つ、一番大きなのはトヨタ  
自動車としてどういうモータースポーツをやるべきかを今原点に戻って役員の方々と私も  
話をさせていただいております。ただ単に参加するだけではなく、社会の役に立つモータ  
ースポーツ。そこには医療の関係、今私どもは献血の問題、それから、後でまたお話をし  
ますけれども救命救急の問題、ここにモータースポーツをやる私どもは常に接しておりま  
して、その部分を愛知県としても今後大いに利用していただくような場面をつくってい  
きたいというようなことでやっておりますので、また後でいろいろと細かいお話をさせて  
いただきたいと思っております。

以上です。(拍手)

#### 【大村知事】

ありがとうございました。また後ほど御意見をいただければと思っております。

次は、柴田さん、よろしくお願いいたします。

#### 【柴田】

皆さん、こんにちは。新城に住んでおります柴田と申します。私の取り組んでいる自転  
車トライアルについて説明させてもらいたいと思います。

自転車トライアルというスポーツですが、自然または人工の障害物を、自転車に乗り、  
足をつかずに走破していくというスポーツです。制限時間内にコースを走破しなければな  
りませんが、タイムトライアルではなく、いかに自転車をバランスよくコントロールする  
か。時には2m超のギャップをジャンプするなど、いわゆる自転車の日常的な動きとはか  
け離れ、迫力あるライディングと、人と自転車の一体感がだいご味あふれるスポーツとな  
っております。

さて、そのスポーツである自転車トライアルは、今オリンピック種目に取り上げられる  
よう動き出しております。どんなスポーツであれ、オリンピック採用種目になるためには、  
全世界にそのスポーツ人口があり、それらの競技会が5大陸全てで行われている必要があ  
ります。そして、自転車競技の場合は、その競技会がオリンピック構成組織である国際自



転車競技連合（UCI）によって管理されている必要があります。

実は日本人とこの競技は関係が深く、UCI が本格的に動き出す前に、日本でも岐阜県板取村で 1992 年から 2008 年まで BIU（国際バイクトライアル連盟）による世界選手権が開催されており、藤波貴久氏、黒山健一氏、有菌啓剛氏、寺井一希氏など、数多くの日本人チャンピオンが生まれてきました。そうなんです、この競技において日本人は強いのです。そのような日本人の過去の実績から考えても、UCI がアジアにおける世界戦を選んだときに、この日本の地で行うことを検討したことは自然の流れとも言えます。

その日本における世界戦の打診とともに会場の検討が始まり、そのとき日本のトライアル選手の集まりの中で愛知県新城市の桜淵公園が候補に挙がり、私にその場所での開催が可能であるかとの打診があったことが、今回私が皆様の前でこのようにトライアルを語るようになった御縁であります。

新城市は、愛知県民の森を有することからもわかるように、アウトドアスポーツをするフィールドに恵まれており、フリークライミングのメッカである乳岩峡など、トライアル以外のアウトドアスポーツも盛んに行われております。それらのことから、新城市政としても、ドゥ・アウトドア・スポーツ地域再生事業という取り組みをしており、トライアルは春の部のメインイベントとして取り扱っていただいております。

また、当イベントで御一緒させてもらっております勝田照夫様が実行委員を務める新城ラリーは、秋の部といわず DOS 事業のメインイベントとして新城市に深く恩恵を与えていただいているとともに、夏のツール・ド・新城は自転車、ロードバイクの祭典として、そして冬の OSJ 新城トレイル 32k は、アウトドアフィールドをみずからの足で駆け巡るトレイルランの重要な一戦として、日本全国のアウトドアスポーツ好きが新城に興味を持ち、新城に足を運んでもらうきっかけをつくっていただいております。それらのイベントを通し、1年中アウトドアスポーツを楽しめる場所「新城」というブランドの形成は、地域観光資源として大いに期待できるものと思っております。

また、私としても、日本選手権と世界選手権によりマーケティングが広がっていくこと、またオリンピックに代表されるようにスポーツとその愛好者には国境の壁がありません。同じスポーツを愛しているという共通言語のみで地域の壁を乗り越え、この日本を応援してくれる国があることをお伝えしたいと思います。

大会が開かれることによりできる三つのマーケティング、運営、競技者、観客者。大会が開かれるのはそれぞれのニーズが合致したためであり、その三つのタイプによりいろい

ろな関係者が生まれてくると思っております。地域振興としては、その三つのタイプのニーズをいかに連携させるかが成功の鍵だと思えます。

大会が開かれることによる公益、イベントを通じた経済効果だけでなく、その地域のブランドイメージ育成にも十分に価値があり、そのために新城市で自分のイベントを盛り上げていけるよう頑張りたいと思っております。

以上です（拍手）

#### 【大村知事】

ありがとうございました。また後ほど御意見いただきたいと思えます。

続きまして、鳥居さん、よろしくお願ひいたします。

#### 【鳥居】

鳥居と申します。よろしくお願ひします。

ももとはデザイナーをしておりまして、学生時代から「人を動かすデザイン」というのをテーマにデザインをやってきておりまして、単に物の形を考えたり色を考えたりするのではなくて、デザインというものが人を動かす行為だということをテーマにずっとやってきております。それで飲食店とか美容サロンとかイベント空間とかのデザインを、デザインの延長上という形で行っております。つい先週、DREAM FANTASIA(ドリームファンタジア)というダンスの祭典をポートメッセなごやで開催するに当たって、統括プロデューサーを依頼されまして開催いたしました。

愛知県はもともとダンスが盛んで、ダンススタジオとかもたくさんありまして、ダンサーを目指している方もたくさんいるんですけれども、つい昨今、中学校の学習指導要領においてダンスが必修化されたことに伴って、さらにダンスの注目度が高まっております。例えば、マドンナのバックダンサーをやられていて、今クリス・ブラウンというアーティストと契約をしているケント・モリ君は愛知県出身でして、この地方出身で世界的に活躍しているダンサーも何名かおります。

DREAM FANTASIA においては、愛知県、三重県、岐阜県、長野県、富山県で予選を行いまして、決勝大会をポートメッセで行いました。今年第1回目となったわけですが、来年以降はこれを全国大会に広げていきたいと思えますし、さらにはアジア大会、世界大会に広げていきたいと考えております。

余談ですが、DREAM FANTASIA の「FANTASIA」という言葉のつづりの最後には「ASIA」という言葉が含まれておりまして、そういった意味も含めて、DREAM

FANTASIA というネーミングをさせていただいております。

私も、ほかの仕事において、アジア各国で店舗のプロデュースをしたりデザインをしている関係もありまして、韓国や中国、タイ、インドなどにも行っておりますので、そういったところで飲食店や美容サロンの店舗プロデュースをしながら、いろいろなダンス関係のところともアプローチをして、例えばインド大会とかバンコク大会とかいった予選会をやっていただいて、最終的に愛知県で世界大会ができるような流れに持っていったらなと考えております。

ダンスを通じて、将来ダンサーになったりダンスの先生になったりとか、仕事としてのダンスというものもたくさんこれから考えられるんじゃないか。もっと広げれば、ダンスだけじゃなくて、ダンスにかかわる振付師とか演出家とか衣装デザイナーとかヘアメイクアーティストとかいった広がりもあるのではないかなということで、ダンスを通じて若者たちがこれからどんどんいろいろ夢を広げていってくれるといいなと思っております。それと、ダンスというのは言葉に関係なく表現する行為なので、いいダンスであれば世界に通用すると考えております。

以上です。(拍手)

**【大村知事】**

ありがとうございます。また後ほど御意見いただければと思います。

吉村さん、御意見よろしく願いいたします。

**【吉村】**

アイアンマン事務局の吉村と申します。よろしく申し上げます。

私は生粋の事務屋でございまして、こういうところは得意なほうではないですが、皆さんのお話をお伺いしていて、例えば井原さんの、世界のスポーツでは物すごく組織がしっかりしているところが多いとか、あるいはスタッフの気持ちが通じるという今井さんのお話とか、そうだなと納得するところが多々ございます。

このトライアスロンというのは 1974 年に生まれたスポーツで、日本に初めて入ってきたのは 1981 年と非常に若いスポーツで、オリンピック種目にはなっていますが、ほかの歴史の長いスポーツに比べればまだまだこれからかなというところがあります。

そんな中で、私ども、常滑市で 2010 年から「アイアンマン 70.3」という大会を開いています。70.3 って何だろうといいますが、これは距離をマイルで表現しているんです。70.3 マイル、アメリカで生まれたスポーツなのでマイルということになっているんですが、全

部で距離が 113km という、人がチャレンジするスポーツとしては距離の長いものです。この 70.3 というのはアイアンマンの中では半分の距離で、フルタイプのアイアンマンはさらに倍の 226km と、とんでもない距離になっています。

知多・常滑の両市で開催させていただいているんですが、制限時間が 80 時間 10 分、丸 1 日、普通人が仕事する時間走り回っている人たちもいると、こんな長い長い時間、長い距離やるというスポーツですが、もう一つの特徴として、それだけ広域にわたって開催するというので、ボランティアの人たちをたくさんお願いしなければいけないという特徴があります。今年の知多・常滑で開催した大会は、選手が 1,350 名の定員、ボランティアの皆さん 1,000 名募集したんですが、集まっていたのが 1,400 名。ボランティアの皆さんのためにつくった Tシャツが足りませんと、こんな状況になるぐらいボランティアの皆さんにも、4 回目をして大分関心を持っていただけのようになりました。

我々道路を使わせていただくということで、地域の中に入って準備作業をしていくんですが、皆さんに私がよく言うのは、「このトライアスロン大会あるいはイベントを開催することが皆さんの目的ではないんです。皆さんは、これを手段として活用してください」ということをよくお話しします。それが例えばボランティアの皆さんであつたら、違う地域の方との触れ合いであつたり、あるいは違う世代の人をわざと事務局がまぜちゃうんですね、違う世代の人たち、普段触れ合いのない世代の人たちがこういったアイアンマン、トライアスロンのボランティア活動の場を通じてお祭りのように一緒に活動していけると、こういう場を提供するようなことも少し気を使ってやらせていただいています。

そんな中で一つお話ししておきたい事例としまして、今回、知多市・常滑市、二つの町で開催させていただいたんですが、1 回目の大会、2010 年の大会は常滑だけでした。もともこのアイアンマンを知多半島に持ってこようということでお声がけいただいたのが、中部国際空港、セントレアさんです。セントレアの 5 周年の記念事業の一環としてやりたいと、そこで出たテーマが空港をぜひコースにしましょう、フィニッシュにしましょうということでありました。空港をフィニッシュにするというと、空港の中だけで完結するのもありますが、長い長いアイアンマンなのでそれはできませんということで、空港と常滑市内の間の海を泳いで、常滑市内をバイクで走り回って、ランでも市内を走って、最後、空港連絡橋を渡って空港でフィニッシュをしないと、とんでもないことを言いました。とんでもないことを我々は考えました。

最初はいろいろな関係機関から「何を考えているんだ」と、優しくそういうお言葉もい

ただきながらだったんですが、この第1回の大会、我々の事務局に空港の職員の方で県から出向というか転籍されている方が入ってくださって、その方が粘りに粘っているいろいろな県関係の機関、警察とか道路公社と協議調整を力いっぱいやっていただきまして、空港連絡橋を渡ってフィニッシュすることができた。ただ、空港連絡橋をとめてしまうと空港の機能が麻痺してしまうので、一般の自動車を通してコースをつくった。そのためには仮設のガードレールを一晩で引いて走路をつくって、競技が終わったら一晩でまた撤去という大作業をやったんですが、その作業であるとか費用であるとかということよりも、いろいろな許認可であるとか皆様方の理解を得るところで、県から空港に入られている方のお力をいただいた。こういうことがあって、日本で初の供用中の自動車道を使った路上競技が実現したということがあります。

これは本当に例ですけれども、やはりなかなか民間あるいは市町村でできない部分をお力添えいただくことによって、スポーツイベントのかさ上げであるとか価値が上がっていく、あるいは注目度が高くなっていくということが実現できるんじゃないかなということ、身をもって体験したということをお話しさせていただきました。

以上です。

#### 【大村知事】

ありがとうございました。それぞれ皆様が取り組んでおられる活動、そしてそれぞれの種目についてのいろいろな思い、それから苦労話、そしてまた現状などなどについてお話しいただきました。ありがとうございました。

それでは、これからはフリートキングということにしたいと思います。

まず、先ほどお一人1回ずつお話しいただきましたが、まだまだつけ加えるとか補足するとか、もう一言言いたいというのがあれば、まずそちらからいただければと思いますが、いかがでございましょうか。どなたからでも結構ですけれども。

#### 【勝田】

私ども、このモータースポーツをしていく中で、やはり我々のみでは難しい部分が非常に多いんですね。ですから、スポーツを今後発展、育成、そして振興させるためには、やはり行政の方々の協力が非常に重要だと考えております。そういう意味で、私どもも社会に役に立つような場面を当然用意しておりますし、それをしなければ意味もないと思っております。そこにひとつ行政の方々の強い御支援をいただくことができるように、ぜひこの機会を通じてお願いしたい。

さらにもう一つは、そういう場所づくりですね。今回、万博を開催しましたモリコロパークと同じぐらいのスペースの新城総合公園というのが県営であるわけですが、そこを貸していただくことができたことは非常に大きな要因だと考えております。なかなかやはり管理者の方々はそのような中で車が走ることをすらあり得ないというようなこと、確かにわかりますけれども、これを今回許可いただいたということは今後非常に大きなウエートが示されると思います。

その中で、先ほども医療という話、それから安全という話をしましたけれども、私もモータースポーツ関係者として、このモータースポーツの技術、運転技術を一般の方にぜひ、一緒に訓練する場所を、新城総合公園を国内最大の交通公園ぐらいにぜひして いただいてというのが一つ。

もう一つは、今回も4万人の方を新城に呼ぶわけですが、今一番困っておりますのが、おみえになる方々の駐車場がないことです。私どもも5,000台以上の駐車場を各地域、企業の方々にお借りして進めるんですが、そこからまたシャトルバスを運営する、これもまた大変で、そういうところもぜひですね、また後で詳しいお話もしますけれども、 行政の方々に多くの御支援をいただくことが非常に我々にとっても助かる と考えておりますので、ひとつまた御協力をお願いしたいと思っております。

**【大村知事】**

ありがとうございました。

ほかにいかがでございますか。

どうぞ、井原さん。

**【井原】**

私も勝田様と同じくモータースポーツに従事する者として、非常に今の意見同意するところですけど、交通安全という意味では、今回愛知県庁の方と打ち合わせをしているときに、二つ大きな大会があると。新城ラリーとウィメンズマラソンということで、ウィメンズマラソンはポスターもウェブ上のPRも非常にうまくいっていると思うんですけど、新城ラリーについてはさらにPRやコンテンツを改善していく余地がある と考えたんです。

そんな中で、勝田さんがおっしゃったとおり、安全運転のパークをつくるということも一つですけど、やはりそのスポーツイベントの会場で安全や環境技術、要は愛知は自動車産業が大きい ですから、ハイブリッド車とかEV というのも、私も経産省とともに推進しておりますが、 そういったものの技術を皆さんに広く知っていただくとか、安全運転を

皆さんに体感してもらう。ただ見るとか映像を見るのではなく、実車で体感してもらうようなコンテンツがあればいいなと考えています。

特に技術については、先ほどお話ししたル・マン 24 時間レースはなぜ世界一のイベントに選ばれたかというところで、これは三つの理由がありまして、まず競技自体が人間の本気を最大限引き出している競技であると、それは頭と体を使うという意味です。やはりスポーツである以上は、人間の本気が見られたときに人が感動してたくさんの方が見るわけですから、そういった人間の本気を出しているというところと、もう一つの柱として、ビジネスで成功しているところと、ル・マン 24 時間レースでもトヨタとアウディなんかは参戦していますが、新しいハイブリッドのレーシングカーなんかは走って、それに付随するパーツ、そしてル・マンの周りの企業もたくさん技術の PR に使っているわけです。そういった意味で、ビジネスと絡めたコンテンツをつくっているところが2本目の柱です。

もう一つは、やはり人のためになる、参加した誰もが人のためになる大会にしているところが大きくて、それはボランティアが 24 時間で 5,000 人いるということとか、ボランティアをサポートするボランティアリーダーが 1 万人いるということがあります。

なので、愛知県ならではのスポーツ振興と考えれば、やはり先ほど勝田さんがおっしゃったように、モータースポーツ、自動車技術を PR するようなイベントで、かつ安全、環境を PR できるような、そしてそれが各企業さんにとって PR や CSR になるようなイベントをつくったらどうかと考えています。

#### 【大村知事】

ありがとうございました。

ほかにいかがでございましょうか。

#### 【鳥居】

学校教育でダンスが必修化されたんですけれども、そこで一番困っているのは多分学校の先生だと思うんです。ダンスが必修化されたんですけれども、学校の先生自体ダンスが踊れないとか、専門的にダンスをやってきた方は非常に少ないと思うんです。一方で、ダンススタジオの先生も非常にたくさん存在して、もっともっと学校の先生とダンススタジオの先生が交流ができるような場がこれから必要なのではないかと思います。

今から 20 年ほど前に「天才・たけしの元気が出るテレビ!!」というテレビ番組にダンス甲子園というコーナーがありまして、一大ダンスのムーブメントが当時ありました。そのころダンスに目覚めた高校生の子たちが、20 年たってダンスのインストラクターになって

いる方も非常に多くて、30代後半のダンスの先生の層は非常に厚くて優秀な子たちが多い  
と思いますので、そういった子たちがもっと学校教育の場に参加できるような機会とかが  
できると、ますますダンスも発展していくのではないかなと思います。

【大村知事】

ありがとうございました。

ほかにいかがですか、どなたからでも結構ですが。

【吉村】

僕も自転車にかかわる中で、トライアスロンの話も聞いているところはあるんですけど、やはり一番トライアスロンなり、また自動車関係もそうなのかと思うけど、公共の道路を使ってのイベントが大変難しい中で、この愛知県の取り組みが非常に功を奏してやらせてもらっております。

新城においては他市行政から非常にうらやましがられる状況も出ておりますし、また今回は愛知県からということで大変心強く思っているとともに、やはりその伝統をうまく引き継ぎながら、事故なきように頑張っていくしかないのかなと思っております。

ぜひぜひ移動の手段として幅広くなると同時に、その御理解をいただけるような県としての取り組みをお願いできたらなと思いますので、よろしくお願いします。

【大村知事】

ありがとうございました。

ほかにいかがですか。どなたからでも結構ですが、いかがですか。

【柴田】

僕も井原さんが先ほど言われた歴史があるスポーツというテーマにおいて、なるほど、ル・マンはさすがにそのとおりだと思います。ただ、僕も日本のモータースポーツに関して古くから、それこそ新城にある本宮山は中嶋悟が来て腕を磨いた場所でもありますし、この地域におけるモータースポーツの伝統や文化というのはひしひしと伝わっている中、それをどう PR していくかが重要なのかなと思うのと同時に、ル・マンへの参戦車も大分古いと思いますので、それこそポルシェと戦ったスカイラインしかり、何年ですかね、45年ぐらいですか、43年、そのときから既に日本はヨーロッパと戦っていたなというのを、僕も自転車をやりながらひしひしとを感じるんです。

やはり今アジアが成長しているとともに、今からそういうスポーツ文化に入りたいと思う中で、日本というのはアドバンテージがしっかり残っているものですから、そのことを



しっかり今度はイベントとして、また地元利益のある産業として取り組めるような努力を、また僕の分野で、また皆様もこのように頑張られている中で花開いていけばなということをお思います。

以上です。

**【大村知事】**

ありがとうございます。

さらにさらにいかがですか。

今井さん、どうぞ。

**【今井】**

今回の議題である「世界に誇れる大会を愛知で」というところが、このお話をいただいてからずっと考えていたところなんです。私は外の仕事が多くて、一年の半分以上を外国の仕事で過ごしているんですけども、「愛知県って何があるの」「愛知県ってどんなスポーツがあるの」って聞かれます。「どうやったら申し込みができて、どうやったら宿泊ができるの」といつも聞かれます。「ごめんなさい、私旅行代理店じゃないのでそこまではできないけど、来てみて」ということになります。その窓口がきちんとしていないということ、そして愛知にはどんな魅力があって、どんなことがすてきで、どんな大会が来た人を幸せにして、もう一回来たくなるような大会なのかというところをPRすれば、やっぱり世界中が認めるんじゃないかなと思っています。

認められるような大会をもう一度根本から考えてつくっていくために、何を準備しなければいけないのか、どこを育てないといけないのか、どこに注目しないといけないのかというところがとても大事だなと思っています。そこにはシステムがあったり、それから組織があったり、そして思いがあったり。私はスポーツをたくさんやります。テニスもやるし、サーフィンもやります。なかなか上手にはなりませんけれども、一生通して幸せになっていくには、やっぱりスポーツというのは絶対欠かしてはいけないものだと思います。いろいろなところを歩いていきながら、もう一回参加したいという大会ってやっぱりあるんですね、どんなものでも。ダンスもやります、常滑のトライアスロンも第1回目に参加させていただきました。もちろんマラソンも。まだちょっと運転はやったことないですけども。そういうような気持ちでもう一度、どういう大会が愛知として本当に世界に誇れるようなシステムであり、仕組みであり、その先にあるゴールをどういうふうにつなげていくかということ、ただ単に学術者だけで話すのではなく、現場にいる人たちと一

緒に、イベント企画会社だけで専門的にその仕組みをつくる人たちではなくて、実際に参加している、ここに集まっているのはとてもすてきな方たちばかりなので、そういうところで一度やっぱりつくり上げていくことも大切です。外に出ていけば、やっぱり外から人が集まってきます。学生たちが外になかなか出ない時代になっているので、愛知県で交流ができるような場所もしくはイベントがもしあれば、そこを通して外に出ていく勇気が生まれるんじゃないかと思います。

私は外国に仕事で行くときに、覚悟を持って外に出ます。なので、どんなにしゃべれなくても、どんなに意見が通らなくても闘ってこれますが、日本にいて、周りに今は外国人がたくさんいます。そうすると、一緒に何かやろうとしても、やっぱり遠慮して覚悟がなくて、言葉の壁もあったり、そしてコミュニケーションのスキルも落ちていきます。なので、もしそこで上手にスポーツを通してやっていけるような場所ができるのであれば、またまた日本でコミュニティができ、そしてそのコミュニティが世界に発信できたときに、やっつと世界から日本に、愛知に人が集まってくるんじゃないかなと思っています。そこをもう一度考えられるようなプロジェクトなりがあると、もっと面白いかなと思っています。

#### 【大村知事】

ありがとうございます。

さらにさらにいかがですか。

勝田さん、どうぞ。

#### 【勝田】

先ほどの話のもう少し突っ込んだ部分を説明させていただきます。

愛知県は、自動車産業が基幹産業なんですね。それで今、残念ながら交通事故が日本一と言われております。これを何とかしたいというのはどなたも考えてみえるわけですが、もっと行政と自動車産業がドッキングして、そしてそこにモータースポーツ及び一般的なスポーツの技術を絡めると、安全性の上がる車もできるんですね。

これはどういうことかといいますと、国交省から自動車メーカーに対して非常に難しい装備、設備をつけさせるように動いています。ただ、人間のレベルが高ければ、そんなものは全く必要ないんです。例えば ABS という皆さん御存じのブレーキのシステムがあります。あれも、レーシングドライバーであったり、全部とは言いませんけれども、モータースポーツの経験者であれば、あの ABS のシステムよりも間違いなくドライバーのレベルのほうが高いんですね。ということは、制動距離はもっと短くとまれる技術を持ってい

るんです。

ただ単にそういうところのみならず、例えばよく言うタイヤの限界がわかっていない方が一般道路を走ると非常に危険だと思うんです。そこにモータースポーツの技術がかなり活かされることも明確なんです。欧米では、歴史が30年40年違うんですが、自動車メーカーが今もこつこつと現場でそういうところをしっかりとやってみえるんです。例えば280馬力以上の車を買う場合は、メーカーがテストコースにそのドライバーを呼んでモータースポーツの技術を教える。我々モータースポーツを経験している者は、例えばカートであったり、車の原点を子供のころから教えるというところにモータースポーツの技術も活かすことができますので、ぜひそういう場面でもうまく私どもを利用させていただきたいと考えております。

**【大村知事】**

ありがとうございました。

ふた回りぐらい皆さんから御意見をいただきましたが、やっぱり皆さんそれぞれのスポーツに思いがあるので、それぞれ皆さん御意見いただきましたが、共通的な話として、やはり一つ国際的なインターナショナルな視点ということかなと思いました。

やっぱり日本で皆さんがそれぞれのスポーツ大会とかに携わったり参加したりしたときと、海外でやっているときと、やっぱりそこは大きく、海外のほうが、特にアメリカ、ヨーロッパはスポーツビジネス、スポーツイベント、先ほどビジネスの話もされましたけど、やはり歴史もあるし積み重ねがあるので、一日の長があるのは事実だと思うんですが、それはやはり、アメリカ、ヨーロッパがやっているようなシステムをそのまま日本に持ってこれるのか、それともやはり改良してというか、少しでも見習って近づいていくのか、そこについてはいかがですか。どういうふうに見たらいいんですか。

どうですか、井原さん。

**【井原】**

そのまま持ってこられる部分もたくさんあると思います。それは取り入れていきたいなと思っております。特に、先ほどパワーポイントで説明があったとおり本年7月10日にあいちスポーツ事業振興研究会が設置されたということで、まず組織づくりというところを強化する上で、ここできちんと、海外ではどんなふうにオーガナイズしているかということを取り込んでいくことはできると思います。しかし、愛知ならでは、日本ならでは、もしくはアジアならではの特色を出していくことはできると私は思っています。

やはりそういった運営に関しても、向こうからのオファーは入れつつ、日本人ならではの細かい運営方式や運営能力というのがありますので、そういったこともこの研究会ですっかりと組織立てていって、それを大きくしていって、PRならPRとか世界へ発信する部分とか、運営とか経済、産業を巻き込むといった、一つずつの部会を細かに築いて、そういったところから運営していけば日本ならではのものができんじゃないかなと思います。

【大村知事】

その点について今井さんも先ほどから海外のいろいろな例を言われていましたけど、その点についてはいかがですか。運営とか、海外のスポーツビジネスというか、そういう大会みたいなものに参加もされたし、実際に運営も携わっておられると思いますけど、どういふふうに見たらよろしいでしょうか。

【今井】

そのまま持ってきてもいいものも、実を言うとたくさんあります。というのは、実際にやるのはスポーツイベントであり、もちろん人種は違いますけれども、求める結果というのは同じものなんですね。例えば、とにかく世界で一番速く走るレースにしようなのか、ここにたくさん来てもらうための大会にしようなのか、ここにたくさんお金を落とすための大会にしようなのか、全然違うんです。いろいろなイベントはそれぞれ目的があって、何となくスポーツイベントをやろうということは余りないんです。

例えば富裕層を狙おうかと思うようなイベントもたくさん世界中にはあります。それと一般に誰でも参加できる大会にしようというのは全く違ってくるので、その辺のところはどういうことにしようかなと思うのであれば、そこのシステムをごそっと持ってきてもそれほど問題ではないかなと思います。

ただ、もちろん文化の違いがあるので、その文化の違いだけを少し考慮して。例えば、外に行ってはっきり物を言うことによってみんなが力を結集できるところと、反対に余り物を言わずに察してねということであれば、そこに重点を置いたりということで、その辺の文化の違いだけを少し考慮していけばいいかなとは思っています。ただ、スポーツは黙っていても結果は出てこないもので、きちんと安全性の面からポジティブな言葉を必ず使うということが前提で組織を運営していけば、それでいいかなと思っています。

【大村知事】

勝田さん、いかがですか、そういう点は。海外と日本との。

## 【勝田】

特にモータースポーツは海外が歴史的にも古いわけですから、残念ながら日本のモータースポーツの歴史、それから自動車文化というものは非常におくれていると思うんです。そういう中でこつこつ今私どもも海外のいいところをまねしながらやってきておまして、ようやく日本の、レースは同じようなレギュレーションでやっておりますけれども、ラリーの場合は日本独自のレギュレーションでやってきておまして、なかなか海外との交流がなかったんですが、最近ようやく海外のレギュレーションとあわせまして、同じスタイルでラリーの場合は開催されております。

そのために今、アジアパシフィック選手権というものを日本に持ち込む、それから、以前、北海道で世界選手権のラリーも開催されました。ただ、その背景で一番重要なのは、モータースポーツはお金がかかり過ぎるんですね。ですから、ここにスポンサーが見つからないかによって、成功するかしないかも決まってくると思うんです。

先ほどのボランティアの方々の考え方とかも、日本人はある意味ではおくれている部分があるんじゃないかと思うんです。そういう意味で、今ボランティアの方々の育成といいますかそういう世界と、また、私どものスポーツ全般を考えても、先ほどもトライアスロンでボランティアの方が1,400人ですか、我々も同じなんですね、ラリーを一つ開催しようとすると最低でも300人の方が必要になるんです。そのときに選手はお金を出せば参加できるんですが、主催するほうは大変な努力と人数がかかるんですね。そういうところにこれから愛知県が欧米並みのボランティアの組織をつくりながらスポーツに協力体制ができたなら、これはかなり強い県になるのではないかなと私は思いますので、ぜひそこを愛知県としても推し進めていただきたいと思いますと考えております。

## 【大村知事】

ありがとうございます。

いかがですか、柴田さん、そういった面について。

## 【柴田】

おっしゃるとおりで、やはり県に期待するところは多々ある中で、僕も三つのマーケティングと言わせてもらったんですけど、スポンサーも一緒に入って、スポンサーも自分の企業イメージを売るというメリットを活かしてもらえるような説明会とかをやってもらえると、僕の拙い言葉で目いっぱいPRだけはさせてもらおうものですから。

やはりそれぞれのニーズが必要であって、おっしゃるとおり選手というのはわざわざ

日々その競技に力を注いで、お金をかけて、その大会に出て成績を収めることに全てをかけております。僕も応援したいと思って、彼らが日本でやる大会を応援しておるんですけど、それと同時に今度はボランティア。やはり触れ合った男の子が世界に旅立っていくのを見るのは大変貴重な体験でありまして、私の知っている子がトライアル、今年は南アフリカに行って世界戦を戦ってきたんですけど、南アフリカで4位になったとか、そういうことをPRしながらやらせてもらう。やはりみんなそれぞれそのスポーツにかかわる情熱というのをうまくPRできていければなと思っております。そのためには、やはりそのスポーツが好きじゃないといけないのかなと思っております。

**【大村知事】**

ありがとうございます。

鳥居さん、いかがですか。皆さんの御意見をお聞きして。

**【鳥居】**

ダンスにおいては、アメリカとかフランスとか、エンターテインメントが盛んなところではそういった有名な大会があったりして参考になるものもあるんですけども、私は逆にですね、アジアで考えた場合は日本が先進国だと思われまますので、日本のノウハウをアジア各国に持って行って、例えばインドみたいな娯楽の少ないところでダンスコンテストを開催してみたりとかですね。インドはインドで「ボリウッド」という映画の産業が非常に盛んで、ダンススタジオでも日本にないような、ボリウッドダンスみたいなことがあったりしますので、そういったところでボリウッドダンスの大会をやってみたりとかやりつつ、アジアの各優勝者を集めてまた愛知県で開催したりといった逆の発想で考えております。

あと、いすゞ自動車さんがアジア各国で車の宣伝をするに当たって、ダンスコンテストを絡めてやったりとかいった事例もありますので、そういった産業のメーカーの宣伝と絡めた大会とかもアジアでいろいろ展開できるんじゃないかなとは考えております。

**【大村知事】**

吉村さん、いかがですか。

**【吉村】**

トライアスロンそのものがアメリカ発祥なのでヨーロッパの歴史の長いスポーツとは少し違うところがあるんですが、一方やはりビジネスという面では進んでいて、我々のアイアンマンもワールド・トライアスロン・コーポレーションというアメリカの企業体が商標

であるとか開催の内容を管理すると。その傘の下で開催しているということがあります。運営のシステムであるとか、あるいはインターネットを使った情報発信というところは、非常に見習うべきところかなと思っています。

一方、知多・常滑の大会は、大体1割が外国人の選手で、国籍でいうと、今年でいうと27カ国、居住地で22カ国。北海道で我々今回フルをやりましたが、1,500名のうち270名が海外の選手で34カ国という非常に国際的な大会をやってみて、そこでやはり選手の人たちの感想であるとか大会に対しての臨み方を見ていると、海外の方は非常に自己責任で何でもやるよというところがあるんだけど、どうしても日本だと主催者にいろいろな責任とかも求めてくるところがあって、特に一般公道を使うスポーツ、ここに集まっている皆様多いんですが、どうしても公道を使うという安全管理の部分とか、そういうところで世界の基準より厳しいのが日本かなというところをすごく感じます。

合理的なシステムはいいんだけど、一方やはり日本ならではのやり方というのはどうしても必要だし、逆にそこを逆手にとって、日本人のお得意のおもてなしという、細やかな運営というのは活かしていきたいなど。合理的なシステムであったりPRの上手さ、あるいはうまくビジネスに結びつけていくというところは学んでもいいのかなという感想を持っています。

#### 【大村知事】

ありがとうございます。

私は、県内といいますか日本全国といいますか、県内各地を見ても、市民マラソンとか市民が参加するようないろいろな大会、スポーツ大会とかは本当に広がっていて、皆さんボランティアとか手弁当でいろいろなことをあれする素地はもういっぱいできていると思うんです。そういうのはどんどんやらしてもらえばいいと思うんですけれども、愛知を代表するとか日本を代表するとか、さらに国際的な大会にまで持っていこうとすると、さっき勝田さんが言われたように莫大な資金が要ると、やっぱりスタッフが、専門的なスタッフ、人材も含めてなければできませんよね。名古屋ウィメンズマラソンは、名古屋国際女子マラソンから30年以上の積み重ねと、やっぱり大手のメディアの皆さんがバックについてやっている。それでも今年の3月が2回目だったんですかね、去年の3月、東日本大震災から1周年というか、それを期して初めて大きな大会にしようということでやったときにもボランティア、人手が全然足らなくて、我々県も前面立って集めてといいますか県の職員にも大分やらしてもらって、それでようやく。総出で、総がかりでやってきて、

まだまだ発展途上だと思っているんですね。それはまだまだやっていけないといけないと思いますし、ラリーにしたらまさに今年がスタートという感がありますから、装いも新たにするのは。

そういったいろいろな要素はたくさんあると思うんですが、改めて今までの御意見を含めまして、やっぱり愛知ならではのいいですかね、日本ならではのとか、どういうことに気をつけてやっていって広がりを持っていくとか、などなどについて率直にといいですか、どんなことでも結構ですから、お感じになることがあれば。こういうことに気をつけてやっていくといいんじゃないかと、それは必須ですよということがあれば、ぜひまた御意見をお聞きしたいんですが。

勝田さん、どうぞ。

【勝田】

この前もテレビで見えておりましたら、味の素の体育館でアカデミーというシステムでいろいろなことを指導されている。今、教育委員会としましては、各地域で子供さんの教育、スポーツの指導をしてみえるわけです。その方たちが世界に向かって動こうとした場合に、日本の今のスポーツのシステムというのは、サッカーとか野球とかプロ化した世界はありますけれども、もう一つやはりパイプ、組織が必要じゃないかと思っております、できましたら愛知県でスポーツアカデミーというものをしっかりと確立されて、その幅の広がりの中にボランティアの育成も含めて。ただ単にボランティアというのは、一度はするけれども二度はしないという方もみえますので、そうではなくて、何か一つの大きな目標を県がもしもつくっていただけるのであれば、そこに参加する方とオーガナイザーの方々の目標、目的がしっかりと出てきますと、いい選手の生まれる世界とボランティア精神がまた根づくという、そういうふうな目的意識が出てくるかと思えます。

ですから、そこに一つのアカデミー的なものを愛知県として確立されたら、これはひとつ面白い方向に行くのではないかなという気持ちを持っております。

【大村知事】

アカデミーというのは、いわゆる競技種目とかジャンルは問わずに、全般的な、地域を巻き込む。

【勝田】

大変なことですがけれども、愛知県としていろいろな方と相談をまずしていただいて、全スポーツは無理だと思いますけれども、一つ一つに何か目的、目標を。そこにもう一つ私



が言いたかったのは、手弁当だけでは世界は絶対に望めませんので、企業を巻き込むことが必要だと思うんです。

私も前、永田副知事とお話ししていたときに、「官民」という言葉をよく一般的に使いますが、私は「民官企」という、これが一緒になったとき。民というのは、まず一般で教育委員会が育てた子供さんたちが育ち、そして次に官がそれを引き上げながら企業がバックアップするというシステムを愛知県で。北海道から九州まで動きますと、愛知県は景気がいいですねとよく言われます。景気のいい県であれば、それを可能にする県になるのではないかなと思っておりますので、ぜひ企業もそこに巻き込みながら。景気がいいからスポーツを育成するとかじゃなくて、こつこつと長くできる企業をうまく県で巻き込んでいただいて、マーケティングだけで考える企業ではなくて、スポーツ精神をしっかりと理解する企業をうまく巻き込んでいただけたらなと思います。とかく日本の企業は目先の数字で動きますので、そういう企業には余り参加してほしくないんですけどね。

【大村知事】

なかなかこれは大変な話だと思いますが。貴重な御意見をいただきまして、ありがとうございました。

いかがでございましょうか。

【今井】

もちろん大会を企画して運営するには莫大なお金がかかります。ただ、ボランティアという感覚が少し。1種類だけではないんですけれども、ボランティアって、外の大会に行くとお金を払ってボランティアをするという大会のほうがもしかしたら多いんじゃないかなと思っています。

その大会を支援して、サポートして、うまく行って本当によくなればいいなという気持ちで参加していきながら、学生は例えばさっき言った車であったり、ダンスであったり、そこをわざわざ勉強させてもらう現場にあるということが前提でボランティアをしている国は結構多いんです。だから、お金を払ってボランティアする大会もたくさんあると思います。調べていただければ、たくさんあると思います。そういうところでボランティアする価値みたいなものをもしPRと一緒に流すことができれば、またちょっと違ってくるかなとは思っています。

あと、大会とかいろいろあるんですけれども、面白い大会が世界中にはたくさんあって、よく私が参加しているのは障害物の大会とか、全員がコスプレして出るというのもたくさ

んあるので、そういう面白さもとりながらやるといいかなと思っています。

【大村知事】

それはやっぱり一つの要素ですよ。楽しくなかったら参加しませんもんね。ただ苦しいだけだったら、記録を競うアスリートだけの大会になりますもんね。

ほかにいかがでございましょう。井原さん、いかがですか。

【井原】

今までいろいろお話を聞かせていただいて、まず勝田さんがおっしゃっていたアカデミーみたいなものはすごくいいなと思いました。鳥居さんも、先ほどダンスの先生との交流の場が必要だとおっしゃっていましたが、アカデミーをすぐにつくるというのは難しいと思います。

海外のスポーツイベントでよくあるのは、子供たちもボランティアできるスポーツイベントがたくさんあるんです。それはお母さんとかお父さんと一緒に来るわけですが、子供のうちからスポーツイベント、新城ラリーでもいいですし、ウィメンズマラソンでもいいですけど、そういったボランティア精神を覚えていくということがすごく重要なんじゃないかなと思っています、そういった枠をつくってもいいのかなと思っています。

もう一つは、一昨年から日本でもやっと英語が小学生で必修化になりました。中国、韓国に 10 年以上おくれて英語必修化になっておりますので、国際大会のボランティアをしながら、英語を使いながら、将来彼らが大人になったときに英語を使って仕事ができる、スポーツイベントも盛り上げていけるようなことを目指して、スポーツイベントで子供の枠が欲しいと思います。

スポンサーをとるのがすごく難しいということは、私も自分でスポンサーを集めていますのでよくわかります。レースの世界では、NASA の宇宙ロケットで使う以上の額を、F1 なんかは 1 チーム 1 年間に 600 億円ぐらいお金を使って、それが 24 チームとか 50 チームとか参戦しているわけで、大会運営に関してはさらに大きなお金がかかっているわけです。それを集めてこれるかどうか。

日本はスポーツのマネジメントがすごくおけているところがありますが、その第 1 として、愛知では産業や技術がすごく発達しているということで、先ほど景気がいいとよく聞かって、私も全国へ出張しているとよく言われますが、まずはあいちスポーツ事業新興研究会の中に一つの案件としてファンドレイジングのシステム、機構みたいなものをつくるということを検討段階に置いてはどうかと思います。経産省なんかもそういったファ

ンドレイジングのシステムをつくっていますので、愛知県ならではのシステム、機構をつくって、検討段階から入ったらどうかと思っています。

もう一つだけ。愛知は残念ながら交通事故率ではいつもワーストのほうにありますが、そういった意味でも安全をPRしていかなければいけないと思っています。

そういった中で、先ほど柴田さんもおっしゃっていたとおり、やはり場所の確保というのが日本で大きなスポーツイベントを生めない理由だと思えます。なかなか道路を貸し切ることができないとか、規制できないとかいったところですごく大きな歴史的な大会が広まらないというところがあると思えますので、交通安全と絡めて、愛知はそういったアウトドアのスポーツイベントで大きな大会を開ける地域だということを発信できればいいんじゃないかなと思っています。

#### 【大村知事】

ありがとうございます。

今ですね、森田さん済みません、台風で新幹線が乱れる中、お越しいただきましてありがとうございました。

もうほとんど終わりがけでございますけれども、旅行情報誌「東海じゃらん」の編集長の森田拓朗様にお越しいただきました。

ずっと今議論して、皆さんに御意見いただきまして、スポーツイベントをどういうふうに盛り上げていくのか、それから海外との比較とか、愛知ならではの、我々が考えていくのはどういう方向がいいのかといったことについていろいろ御意見いただきましたが、森田さん、せっかく来ていただいたので、腹いっぱいしゃべっていただきたいと思えます。

まずスポーツイベントについて、愛知について、そういったことについていかがでしょうか。

#### 【森田】

東海じゃらんの森田と申します。本日は、到着が遅くなりまして、まことに申しわけございませんでした。

私、じゃらんという旅行情報誌で編集長をさせていただいていまして、今日はここまでどんなお話しされたか踏まえずにお話しさせていただくのは申しわけございませんが、一応そういうメディアに携わる人間、あとじゃらんでいろいろ地域活性系の案件もやっておりますので、その立場から3点、御意見というか御提案させていただこうと思って準備してまいったんですが、お時間もあれなので手短に。

メディアの立場からいきますと、まず一つ目に、何か大きいスポーツ大会で人が来られる。ただ来て見て帰られるというのではなかなか地域活性とか地域振興というところにはつながりづらいなと思っています。せっかく来ていただくのであれば、それだけじゃなくて、愛知の地域振興ということであれば、来たついでに愛知でいろいろ観光していただいたり、消費、御飯食べたりとかいろいろ買い物していただいたりとか、どうせいらっしゃるなら宿泊していただいて長期間滞在していただくみたいなことを一緒に提案するということで、ただ来て帰るということではなくて、それが地域振興につながるかなと。そこで愛知っていいところだねってなると、さらに来年とか、次回の開催時も来ていただける。そういうところも企画していきたいなというのが1点目です。

2点目に関しては、そのイベントを実施する際に、どうやって告知をしていくか。ただやりますよと言っても、なかなかそれを浸透させる方法が難しいところで、一番最初に知っていただくところという、いわゆるホームページで告知というのが一番スタンダードなやり方だと思うんですが、私は紙のメディアの編集をやっているんで、最近弊社でも紙メディアというのが改めて再認識されています。

20年ぐらい紙のメディアの担当をやらせていただいているんですけど、10年前って「もう10年後には紙の雑誌とかなくなるんじゃないか」みたいな話をうちの会社でもしていました。ただ、やっぱりなかなかなくなるんですね。読まれている方がいまだに、何万人、何十万人、何百万人いらっしゃる。

そこって何かあるのかなというのを調査とかもして見ていまして、やっぱり紙のメディアとか、あと電波も一緒ですね、テレビ、ラジオもそうなんですけど、発見があるなと思っています。インターネットで探すという、例えば何かの大会がある、その大会についてグーグルで調べる、詳しくわかったというはあるんですけど、そもそもその大会があることを知っていただくのには、インターネットでそこに接続するというのは難しいですね。そのときに、テレビCMで見たとか、雑誌を読んでいて今度こんなイベントがあるんだという動き、発見があるというのは、我々「オフラインのメディア」と言っているんですけども、いわゆるインターネットじゃないところでの発見は結構大きいなと思っていますので、紙メディアとかテレビ、ラジオ、「紙メディア」という雑誌もありますけど、パンフレットみたいなものもありますね。そういったものでまず発見していただく。

詳しい情報を調べたりとか、予約しよう、チケットを買おう。ここはやっぱりちゃんとインターネットのサイトをしっかりやる。

さらに、それを拡散していく、多くの人により知っていただくという意味では、この何年か言われているソーシャルメディア、フェイスブックとかツイッターをうまく活用して、より多くの人にこんな面白いイベントがありそうだよ、一緒に行こうよみたいなものをしていただく。この三つをうまく使いながら告知をする、認知していくというのが、よりスポーツイベントをやるときに、知っていただいて来ていただくためには大きなテーマになると思います。これが二つ目です。

三つ目、特に今日来ていただいている方、国内だけではなくて国際的な大会をやられている方が多いですね。という、国内だけで告知して人が来るというレベルではなくて、やっぱり世界的に盛り上げたい、海外からも多くの人に来ていただきたいということを考えますと、海外に向けてその情報をどう発信していくか。これは今のソーシャルメディアなんかをうまく使えばいいと思うんですけど、知っていただいて来ていただくときに、やっぱり受け入れ態勢ですよ。例えば、サイトでもそうですし、実際に来ていただいたときに多言語対応、日本語だけではなかなかわからないので、いろいろなアジアの言葉、ヨーロッパの言葉に対応する。あとは、せっかく海外から来ていただいたので、この方たちにも愛知でいろいろな活動をしていただく。この方もただ来て帰るのではもったいないので、愛知の魅力を伝えていく。

我々見ていて、愛知県ってどうしても、海外から来られた方が通過されるケースが多いんですね。東京首都圏とか関西京阪神に行かれたりするんですけど、名古屋を素通りするケースが多いです。最近では岐阜の高山とかはすごく海外の方がいらっしゃっているんですが、伊勢とかすごく魅力的な観光地、当然愛知そのものにもいっぱいありますが、素通りされるケースが多い。海外から来られた方に、愛知って日本のど真ん中で、東京へ行くにも、京都へ行くにも、高山へ行くにも、伊勢、熊野へ行くにもすごく便利な土地なんだ、そこをちゃんと伝えていただくことで長い間愛知をベースに活動していただく。海外から来られる方は1週間とか1カ月いらっしゃる方が多いので、そういうことをちゃんと伝えて、愛知の魅力を伝えることでより地域活性、愛知でいろいろなことを活動していただくみたいな三つのポイントにちゃんと取り組むということが、スポーツ大会そのものの成功、プラスアルファ愛知の地域活性、地域振興につながるんじゃないかなと思っています。

#### 【大村知事】

森田さん、もう一つお聞きできればと思うんですが、スポーツイベント、スポーツ大会そのものに全国とか海外からも人を引きつける魅力はあると考えていいんですよね、そこ

は。

【森田】

ちょうど今オリンピックも、経済効果何億みたいなことを言われていますけど、例えば、私どもの事例で申しわけないですが、我々去年から「雪マジ！」っていうキャンペーンをやっています、要はスキー場にもっと来てもらおうと。スキーの人口って、1994年がマックスで1,800万人ぐらいいたんですが、最近では600万人ぐらいしかいないんです。スノーボードを入れても1,000万人ぐらい。スキー場って民間でやられているケースもありますけど、自治体でやられているケースが多いんです。これが要は地域の雇用とかにもつながってたりするので、今ここはすごいしんどいというので、一緒に何かできないかというケースをやっています。

若い人がやっぱり足りないんで、ただでいいから来てくださいというのを、北は北海道から南は九州まで69のスキー場と一緒にやまして、19歳の人なら漏れなくただでリフト券をあげますと行って来ていただく。そうするとやっぱり人がすごく動くんです。19歳の人口の5%がそれで動きました。そういうイベントをやることで人が動いて、人が集まってくる。集まってくると、スキー場のリフト代は無料でも、御飯も食べたり、泊まったり、レンタルしたりみたいなので動く。

これは国内の事例ですけど、同じことが海外に向けてもできるかなと思っています。要は、最初にメディアとかを使ってどれだけこのイベントが面白そうかということを知っていただければ、やっぱり行きたいと思うと思うんです。そのときにちゃんと受け入れ態勢があると来ていただく。それを海外に向けてちゃんと発信すれば、イベントそのもののプラスアルファ愛知で面白そうなのがあるぞと思えば、世界中からの集客は可能だと思います。

【大村知事】

ありがとうございました。

柴田さん、いかがですか。

【柴田】

時間も押してきた中で、僕としても伝えておきたいことがあります。

2005年に愛知県では愛・地球博がありました。この年に愛知県はオリエンテーリング世界選手権という大会を誘致しました。その大会を誘致するに当たって、先ほどからもいろいろ言われているヨーロッパの組織と、また日本のマイナースポーツの組織との交流の中

で、日本で愛・地球博をこの愛知県でやりたいと招致をしてきたのを、僕も僕の大会を開くに当たって先輩から聞かせてもらった経緯があります。

やはりこの愛知県で自分たちの好きなスポーツをしたいということで、わざわざヨーロッパに行って、それこそ国連と一緒に、どんな大きい国であっても、どんな小さい国であっても1票1票があるそれぞれの国、小さい国を日本の味方につけて、日本での世界戦を決めてきた経緯がある。

その中でも、スポーツ好き同士が、日本を全く知らないけど、あなたたちの情熱を信じて、一生に一度行くか行かないかわからない日本というところで自分の好きなスポーツを試みようという思いを込めて1票くれたという話を聞くと、同じスポーツ好きの中でも、スポーツにおける国際交流のすばらしさを感じるものであります。

そして、その大会は、北朝鮮も選手団を派遣して、日本で開かれました。政治からかけ離れた中で、自分たちの好きだという思いだけで日本で開けたというのは非常に珍しいケースとともに、やはり現場のスポーツの好きな共通言語をいかにみんなで共有し合ったか、そちらの結果があるんじゃないかなと思っています。

そのことをこうやって伝えたかったというのは、愛知県は過去にもそういう経緯があって、そういう素地があるということ。その中でぜひその点を今度はイベントじゃなくて、今後も続く年通しの事業として推進していただければなと思います。

以上です。

**【大村知事】**

ありがとうございました。

鳥居さん、いかがですか。

**【鳥居】**

ダンスの大会をやっているいつもすごく感心することがあるんですけども、小学生とか中学生の子たちが非常に多いんですけども、みんなすごく礼儀正しいんです。これはダンスを教えている先生たちの指導のたまものだと思うんです。コンテストの最後の審査員の総評のときでも、当然ダンスのテクニックのこととか構成のお話をするんですけども、最後に必ずお父さんとお母さんに感謝しましょう、先生や仲間に感謝しましょう、この会場をつくってくれた人たちに感謝しましょうといったことをちゃんと子供たちに伝えている。それをちゃんと子供たちも理解して、会場の中でも非常に礼儀正しく挨拶もするし、本当にいい子たちに育っているなという感覚があって、こういったムーブメントを大

大きくしていくべきだなと思います。これは愛知ならではというか日本ならではのことだと思しますので、ダンスがうまいだけじゃなくて、精神的にも豊かな子たちが世界に出ていてくれるとうれしいなと思います。

【大村知事】

吉村さん、いかがですか。

【吉村】

愛知で何ができるかというところで、我々のアイアンマンの大会がセントレアを会場にして、受付であるとか競技説明会、パーティー、そういうのはセントレアの空港の中でやらせていただいています。

そういうこともあってだと思うんですが、海外から本当にたくさんの方が来られるし、日本のど真ん中というところもあって、国内の選手についても、北海道であるとか福岡、沖縄からも多数来られる。だから、これをぜひぜひ。やはり日本の真ん中でアクセスのいい場所だというところ、かつ、そんな空港があるのに知多半島というのは割と自然がたくさんあって、路上競技を比較的やりやすいところでもある。こういう特性を我々が活かしているところもあるので、またほかのスポーツでもぜひそういった真ん中というところに着目していただければと思う。

あと、勝田さんのおっしゃっていたスポーツアカデミー、非常に素晴らしいことだと思います。知事もおっしゃっていましたが、なかなかボランティアが集まらない、難しいよというイベントもたくさんあると。我々人数が集まっているんだけど、実は体系化できていない、組織化できていない。人はいるんだけど、これから5回目に向かってどうやってそういう人たちに定着してもらって、かつ、いろいろな意識を持って活動していただくかというところがこれからの課題だと思っています。

国体をやった都道府県で国体のボランティア組織をその後活用しようという動きがあって、ボランティアバンクとかいう形で活動を継続するというのはよく見受けるんですが、ぜひ先にボランティアの活用ができるような組織を県内でつくっていただくことがあれば、一つの大会だけではなくて、県内のイベント、共通でボランティアの方々が継続して活動できる場ができればいいなと思います。

どうもありがとうございました。

【大村知事】

ありがとうございました。



スタッフ、ボランティアはやっぱり大きな大会をやるのに不可欠だと思いますが、愛知県は 2005 年の愛知万博を契機に、そういったボランティアなりサポーターの方々は日本で一番たくさん集まってくるということになっております。ただ、人数は集まってくるんですけど、やっぱり組織立って、体系立ってということになるとなかなか。先ほど申し上げた名古屋ウィメンズマラソンはボランティアだけで 6,000 人超えてくるんです。でも、あの大会の規模からするとまだ足りないというのが本音であります。そういう意味で申し上げたんですが。

いろいろなイベントをやっても、本当に皆さんに支えてもらっているというのはありがたいなと思うんですが、それが組織立って、体系立ってばばっと動くようになるのは何か一工夫まだ要るのかなと思いますので、それはまた皆さんと一緒にこれからも考えていきたいと思います。

そういったことで、愛知ならではのというか、愛知でどういうことができるか、考えたらいいかということについて一回り御意見いただいたんですが、最後に森田さんいかがですか。

【森田】

さっきの話とも重なるんですが、我々フェイスブックをうまく活用するといろいろなことができるなと思ってしまして、ボランティアの方の横のつながりだったりとか、組織化みたいなところでも活用できるなと思ってまして。

またちょっと私どもの取り組みで恐縮ですが、最近、富士山とか鎌倉のほうでの活性事例でフェイスブックを自治体さんとで共同してやっている事例がありまして。町の人たち、富士山ですと 3,776 人集めて、この人たちが富士エリアのよさを外に向けて発信していく。ただ普通に情報を発信するんじゃなくて、フェイスブックでやると人の顔が見えるので、リアルにそのよさが伝わる。発信するよさと、それを一緒にやっている人たちの横の連携もできてくるんです。こういったのは今の御時世ならではのやり方で、ボランティアの軍団というか結束力を高めてうまく組織化できるみたいなこともできるのかなと、今の話を伺っていて思いました。

【大村知事】

ありがとうございました。

そろそろ時間がやってきたようでございますが、いかがですか。最後に一言だけ、もう一言これだけは言っておきたいというのがあれば。よろしいですか。

【勝田】

ラリーのみならず、私どもも世界に参加したときに、その地域でホストタウンというのが必ずあります。そのホストタウンというのが、ボランティアも含めてしっかりと組織立って、まちづくり自体が受け入れ態勢ができてきているような町がいろいろあります。愛知県にはセントレアもあります、港もあります。日本の真ん中で何を行うにしてもエリア的には非常にいいポジションだと思うんです。ぜひ愛知県、行政主導型でも結構ですので、そういうまちづくり、イベントづくり、先ほどから言っておりますように企業も含めて一緒に盛り上げていけば必ずいいエリアになると、間違いなと思っておりますので、ぜひよろしくお願ひしたいと思ひます。

【大村知事】

ありがとうございます。

本当に2時間あつという間に過ぎまして、ありがとうございます。また、森田さん、新幹線が混乱する中おいでいただきましてありがとうございます。

先ほどからたくさんお話をいただきました。スポーツアカデミーといったようなものをつくり、スタッフボランティアの皆さんを育成したらどうか、組織立って、体系立ってやられたらどうかというお話だとか、今お話ありましたホストタウンみたいな地域づくりとどう結びつけていくか、そういったことも考えたらどうか。また、ファンドレイジングの機構システムをつくられたらどうか。また、もっともっと面白さを追求するといったこともどうか。

ここにしかないようなイベント、大会にすればやっぱり、特徴づければ全国、全世界から注目されるし、それでもって知名度は上がっていくし、多くの方に来ていただけるのではないかと思います。名古屋ウィメンズマラソンがギネスに1回目から載っているというのは、そういうこともあると思いますし、今度のラリーもですね、日本では多分あんな感じでやれるところは多分、よそはそう出てこないんじゃないかと私は思っていますけど。

【勝田】

私もそう思います。大村知事の決断には逆に驚きました。

【大村知事】

公園の中を思いっきり走っていいぞというのは、そう簡単に出てこないんじゃないかと私は思っております。

さらに私の夢を言うとですね、アイアンマンレースでも超アイアンマンレースをやって、

豊橋から渥美半島をずっと走って、伊良湖岬から師崎まで泳いで、最後自転車で熱田神宮まで知多半島をずっと行くのはどうかと県庁の中で言ったら、一笑に付されているんですけど、無茶言うなと言われてはいるんですが、いけませんかね。それをやったら無茶苦茶来るような気がするんですけどね。

【吉村】

やらないとだめですね。

【大村知事】

泳ぐときに潮に流される危険性がないでもないですが。

そういう面白さとか楽しさとか、夢があるようなことが必要ではないかと思います。東京オリンピックの話じゃないですけど、やっぱり夢と感動だと思いますし、本当に身近で夢と感動を与えていただけるのがスポーツの醍醐味ではないかなと思いますので、そういった面で私ども愛知が、たくさんのアスリートも、そしてまたいっぱい競技種目を支える多くの選手なり、本当に草の根のスポーツを楽しむ皆さんもたくさんいますから、今日いただいた御意見をしっかりまた活かして、一歩でも二歩でも前に向けてやっていければと思いますので、またこれをぜひできるだけ形にしていきたいと思っております。今後の愛知県の地域づくりとかスポーツの振興にもぜひ役立てていきたいと思っております。

今日は2時間があっという間に過ぎました。貴重な御意見をいただきましたことに心から感謝を申し上げまして、今日の会議を締めとさせていただきたいと思っております。

どうもありがとうございました。(拍手)

【司会】

ありがとうございました。これを持ちまして平成 25 年度第 2 回「大村知事と語る会」を終了いたします。

【終】